朝野雜載

九

明治三十年 三月

特別
14
1919
29

38- 8857

以下
9丁
白紙

176335

○天皇陛下ハ皇太后陛下ヲシテ（ここ）（之御）あらせ
田（田）と御せらる（皇太后陛下を皇ハせらるとき）又皇后陛
下ハ主上を呼ハせらること恐こうあを呼ハ
奏ずるに皇后陛下ハ聖上に恐し原下と仰せら
れ陛下を他ハ御せらるこよりの或ハ云ハ主上
○近衛公ハ近衛ハの主風の方を問ハ公曰く
今も近衛ハを多くしく近衛さんで原の花
欲へ近衛ハすると

○大隈伯在野の聖上の御市ら地図の勅旨を
献ず後年伯ハ伯ハ爵ハ伯ハ爵ハとて
陛下を陽ず陛下ハ勅ず勅の名を汎愛あらせ
（勅の名とのたし）勅も珍らしき伯を接拶あ
ら〻る而して伯ハ爵を何の事なるを解し得ず
御〻りて御献し勅の事ハ思ひ到りず
と後伯ハ勅事を後つて曰く勅ずとう
を多しく陛下を中上ず事ハあるまじと思ひ居
りしに聖上の一々勅の名を汎愛あらせ
れしハ主ありまず勅を御拝あるまで
擁を築て御拝あるまで勅しとる勅の花
あるとなるハ奉しこと
陛下ら主と御あ修

○昨日ハ定めて必ず第十議会ニ於て何にを定め時ハ旦ニ時ま
頃なりし議場閉黒として議案を読む能はず而して電燈を
点ずるの刻まで暫らく見合せ十数名の給仕ハイザとて
直ちに燭台を点しもてきをおしまりこれを各自の案頭ニ置
きぬ然るところ四五十本及びや忽ちニして四囲の電燈一斉ニ
輝き出て…呼びぬる余ハ此光景を見て議長宜しくあら
樽山の為めニ…刻しるすを以て樽山議長の…議長
第…議場閉黒なりと次ぐ…と例の
ぬ…咄…議長…あるもあるさんび第十議
会も…無名として…議長の議長席ニ…と
云ふ称なるんと…議長席を…樽山
の…件

○田中正造第十議会ニ鉱毒事件の質問書を提出す
其賛成者四十七名提出者十八名此ニしこれ俱に…
人と曰ふも田中ハ田ト十八名ハ依然…同士の数ニ擬
し賛成者のハ義士の数ニ擬す 此義ある儀ニ未
曾…一件の上ニあると揚言ます
○鉱毒問題の起りし頃同日文字偶ニ古河の鉱問
ところ樽山ニ向ひ余のぬきさしならぬ…被害者ハ一日も
を助けんとをはずありしと鉱毒被害の甚しきニ之れを
也むる…田中と同盛ニ唯々被害甚しき為
鉱業を中止すべしとニある如くてハ全国鉱業者の
関する亦余等日ニ何んぞ係るなしと気之れニ同意せ
ざるもの…ことを以て余等ハ陰ニ鉱業停止の

暴虐を恐れしめざるべし一方こゝに田中を向て抑制する所あり又一方に於ては南部若しくは志賀なる所あるこゝろのあり百方周旋苦心目的を達せしとかや

○前番番に接書の内紙あるとやくや高田へ金を渡すべしとの事にて前番の書あるを下すべしを論す高田もこれを同じ考へ居るに係らず高田は接書を受るまゝ拘ることを深く考へ高田もまた前番の内心を推察せざるべからずと云へり

○高田は初め高長なることを弱とす一方金を渡す金人を任ずべしと論ずるに高田は高長を以て帰伏候を要するあり高田を以て

地を方張候と論ずるに伯は明瞭を見て之れを如何ともすべしと接拒すべしと云ひ又面を高田のもとに高田のもとにあるとの事とて伯はいかんと数回こゝろ考つて見よ」と云くるもおくのし

○新谷夫の先づ以て国を長として大将職を心ゝの一事なる中村伯に曰く板垣の心配なるを審なる去年八何候なる場合を服腹痛の病を出だせ八一のこゝろ、腹痛なり

○稲垣海防長遣羅の人侯と仕なる外務省の高芳を相談す行くべきの方なり伯と高田と二手板伯高田の氣を毒なるべくこんこう行う

○初め道安重綱安危の故事を候補者として十兵衛と
内末の舊臣（後これを改めけるは余も其一人なりしより文字を）
舉げとするに取りて其の流れありしも誰後とせ流れを
の諸侯の外によらせりしと見ゆ）内末損振して當年に
養子君を養く而して其家屋高田主之の家へ七種の子
内末より内余を得たる絶家しの後に失しとある絶家
養子は某へ下部も留目なくいろくと居て居る家の内
君も留目なりしとて臣を以てするんハ家職するの如す
と言ふを得るとも絶家の後とる絶家あらざる流もあり
内末を一二ヶ所の外の家職やしむるハ浮泉の家を
ますとん某々に泣寝入りすとあるの其人しる氣の毒
千萬也（犬養氏之稀なりける）

○大東枕流自ら大目付に次ぐ以下の政議に與りなさる
自惚あり而して古の僻縮絶家の後の家を擬するに三宅
相愛の故事を以てす枕流深く之を怒り
外の華範を揺げ犬甘山に悔へることん犬甘氏本家し
の後とす
○肥塚を鏡山氏長たらしめんとするや肥塚ハ其高を
大目付とするの條件を附し次官たらしめよと申出しが
然れとも其当局ハ其議に應ぜず肥塚を大隈に配りたり
而して肥塚ハ副長の位を以て後に鏡山氏を掌れたり
○大隈氏は後の君主とするや某田大夫を将て後鏡山氏を継し
君が孫の君の志を継ぐもの志賀氏後の君主とせ
さりしと云ふ

○菊池九郎ガ事をおもして後撫山内あを見て内なの曰く
ドウヅサくきいて貰ひたいかア曰く私さんとでハ
迚も甘くハきられません内あ曰く生面つこ老する然
則ち加事ならまよ足ると此事を学生語り出で而
る後評して曰く英雄同士の議論く又格あのもの
あると一笑す

○要砂川雄峻第十鍛冶開年中大阪梁林問鉄目
数の名あ出京時に本桜町遊の紹介を蒙るに余す一
夕砂川の為めに人を招き宴席をひらいて砂川の事を
述べ砂川曰く今から松へ行く能わず但し酒撫するある
すんハ何ぞそても行くとまする余ハ砂川の為めますま
ある似合ころ遊々也招まよれの為めに人を招かせ置き

なかうるに可惜く挨拶せと且つ惜しみ且つ特に識るまでる
を謝しを砂川の様相にをしむるまる迄詰めあつて曰く余拙学
中父を失ひ生哀の世てうさうしを遺憾とす今日併に忌
辰にあたるゆゑに行く能ハずと而して使のものを手けハ彼
れ人様をも羞しせ謹信しそありしとの其言ハ玲瓏なしき

○高田早苗の遊ぶ為ぶ者に依やうん取あて如何にも大勤
なるの為日余の小学撫の目を常として読ふに生徒全
を為ち言ひに近き低頭して迎て曰く役人とさへ
なかつくハケンシイと秦上にある多くの印判を指し
て曰くまず第一此等の判の捺しやうの如きなし
喧しく屢々なる錬習中にも印判さへのと
秦端に据ひはある呼鈴の鈕を指ししで曰く此の

鈕を押すことなくしらべいこしい各課を面白くおもすれどもしらべて或人某藩の長崎に行くに付き務多く来る所
金あるを知らず先刻小使を呼ぶとて三ツノ鈕を一斉
スコツク押しとなる深夜急来まり金とる
すハ実なる一家を乗しとなる
○五番目の外務番面白き面白もくるくや御番面
室村坪内通達入りて四人の面白
もちろん仕もしハ大なる賀もやるを得ずと意怪
むて問ふて曰く君ハ六四沿を知ずるや答村曰く
全体面白き面白もなんと何をするやら見るとて
さぶり唯々面白の一家金の高も高ん大なる
面白しなるの祝せるとの面白なる所以なるを

○屋敷の葉金の新出市場廣幸の一夕流を
始めく行き妻流十数名、一日金五葉を始め五葉
四く夕流中の番面白ハ微妙金数面をもつて
こそ来ます

、小町大路を行く
下男上人を呼ふ

、風がいてもり廣
上り廣
兵映しを三浦屋いハ
逆浦屋

、草刈場の
骨折り花

、這大思之まして風之音
花火の音花のまして也之横つる

五葉の四つ〜こん等し雪の門生之事一ツ之人在八度
ま之紙ゝ之先生自ら歌を出して自ら雪の句を書
す此ゝ〜雪の句を見れば海苔を書の湯雑ゝう
き歌を之ゝひたる蛙を〜と七ゝと五葉の四つ〜
ゝ清水歌を命ずる人ゝ清水味噌を義を作ら
人と門生即ち

十三七

の歌を七すれ歌ゝ思ふまの所

九〇六

の義を作る義し月ゝ雪一晩京ゝ義をす
ゝゝゝ

〇一日大義を作りて清書清水、彼の清水
所ゝ彼の本ゝ書ゝ彼の人和の清水御家保を学
で六年の久しきゝ及び一旦ハ能く生の薩奥之
面ゝゝと義し彼の薩中ゝ義ゝ次男の
旅をんて御家流を学ぶ概ゝの計をちさんと
ちゝゝ彼の人今日金ゝお流の書を紙す、今日
尚ゝ御家流を書きゝやと問ゝ紙ゝ紙

れども真面目に字をかくに時は実直清潔の風ありて
出て困ることなし
○大春未生又云ふて日下部の学く日本にて書法を
ならしめい美濃なり彼の人能く欧陽詢を学ばし
その然れども惜しむらく美濃へよき法帖を学ばず欧
陽詢の碑に倣ふ我国にて摺る
ものを見るに唐碑なるものを倣ひ
賞能まるを以て黄紙に碑面をすりくること
も度々ありしかも初は肉太の字なれど筆研の変の
めるを摺るに法帖と字も新く変ぜ
るを美濃へ生徒に教へるまでを学ばんと
書法に浸潤するに字体豊肥なるなり

○北沢大洲侯富士山を詠ずる詩次韻
ある山田一郎十四年前
を迎へる高尾山麓上一坂
の人物を懸賞の日に
り始めて一日の休憩
以後通勤をなして
五年の無人なり
す
○多賀五井宗哲は極めて
者なるを投ずる人
明人と法をなしたる
人なり北沢上東

営なりといひ小時ハ繁昌なりしも怪しむべき事を聞く人ハ日毎に
敬遠るに至る枝葉なく今ハ名を称して花柳に沈溺す
ること十数日狎妓輩の撫で文繁くなりて酒債
積みて巨額を為すも敢て之を償ハず而して偽玉井
ハ猖獗として妓の為に妝粧を購ハんことを約し遂に地
を去りし「今夕此ハ居こゝに於て此所の金を持参する故
此を宿まし」と述べ立ると告し乱るゝに至る妓の情夫
のあるならんと云ふ妓も之れを知る能ハず妓輩を集めの
手紙を偽す、其妓女の言を云ふ臨むに妓ハ母に
先だて早く妾を呼ばんとす此心を云ふ家に帰る
国に逢ふことあらバ玉井の耳朶を掻きて諦へよと命じ
て妓ハ一通の書状を手に通じ玉井に渡して投ず、玉井

国と婦人より書状を受けて莞爾として思ひも寄らぬ見舞
に泥酔遊蕩の或る狂女が此所を訪ひ入れたることありこの
手紙人の書状ならんと取て手に入れて開封せずして
素知らぬふりで其中を見て或る怪しき女の手
通ずれば玉井を呼び係りてありて玉井ハ知らぬふりをなして
通知を添へて後再び村の某の茶店の主人に至り玉
井に来り逢はんことを求めしが玉井ハ初めて怪みて且つ
妓ハ宿のみに人を遣して来意を問ハしめん妓ハ来
の母として妓の言ひ聞かしを信じて其の娘のことを始めて別
り玉井ハ大いに驚き、百方手を尽くしてこれを留め置けども
売婦家の納得せず果して偽玉井ハ後悔して
旅店に主人を伴ひて詫言することとなりしが

旅店主人玉井も見るに及んで悄然として目下に見えぬ大
なりしと老婦先生漢文を渉して情況立去りしと
余輩も亦之を聞て嘆賞絶倒せり

○友人平田譲衛先生ハ米国より此頃（五月廿六日）
紐育より一書を寄せて曰く
当地則ち共和政治を奉ずるこゝに時日を長くし来れり
然るに親しく其事を見るに及び漸く其政体を解し
得て日本に在る時遠く想像せしよりハ遥に違ひ大に驚き
るを知る当国政治機関の作用ハ観るに見るべきもの
獨り其政権を奪ふの総て人気に依ると雖も其骨
頂とも云ふべきものはクリブランドの下に在る
米国の有名なる学者の米国を知るアッキンレイ

此機ニ乗し種々の議論を以て議会の廃を復
以て国会上院にて討議中の海関税法案のごとき
其議論の為めに遅延あることの甚しきにて民主
党が法律の好結果を生ずべきを信ずるとの意ある
にも拘らず上院之を議席の多数を制せる共和党にて
せしむるが故に其発現の時を失ひ法案の運命を
多く転倒せしことあり難きこのなしと某議院法案の
の修正を以て通過すべき事を得ることなく他に
又其派の銀党及デモクラッツの多数も亦之れを通
過せしめんことを希望するも其法案の精神を通じて
之を通過せしめんことを希望する何とも不便の法案
の主たりしハレパブリカンの勢力を減殺し法相の退

に利益を博せしものなり斯る部門ハ我邦にある
ては頗る珍らしからぬ技なれ又其他の事も其の実
業者ハ政治上の地位を顧みず猥りに運動のぬけ目なくハ
職業的に政治家たらんとする人之を呼んでプロフエシヨ
ナル、ポリテシヤンと云ふ而して此等に先生達の公金
を私することハ実に驚くと云ふ殆ど絶言の十ヶ年
の掃除費ハ三百萬弗 即ち我か言定費の二倍なれとも
市中の街衢中猶清潔ならず人馬の往復尼成も腰撃
すして書紙等第一の要路たるフヒフス、アブエニユーある
のみにして其他ハ到る所馬糞を散布しあるもの多し
実に驚入りたるおもむきに候ふこ
○六月下浣 志ゝ本す（小川為次郎）来り 一月株式執行部の

取引所ニ申立て組合員ハ猶六月八日前ニ千
株を分与することに決し是ニ於て出資者也小川為次郎
自ら此資本を依頼して運動を為す能ハす金主二
人を要す今ハ小川ニ為廣ハ増山を訪ね一万五
千円を借用として利用しで取引所ニ
五十株の名義を依頼すること一万円の増山ハ取引所ニ
又ハ取引所へ申込ミ其を延期して六月十五日
取引所ニ河野氏を訪ハしめ其木村金子ニ六月
に為金主を世話する事とし其節印
の一月小川運動して其の切まるや否やなり
○株の申込ハ快活に田中 其常に求めたる株の清河
なりしは一日済せしに者皆見え実に驚きして見ゝ金主

第三回に入りてはあまりおかしからず諸人所謂くだくだ諸
出来しと一字も来たる事ありしが後半は諸人一冊を除
べて余は書を返しぬると云ふ四冊中の三の草稿にして
の後なり
日坪内逍遥中学の教頭として書生を信頼の諸事を
なし快諾す 年の豊をもしぬに便に依やし
む学校組織を改めし逍遥「中学の教頭に就き所
教を述べ」しの試問を受けず一かけあり得る自信は居
し余の見る、坪内教頭の倫理の講義は実に席の空
話を多くの教あり、しく此教へらんことを望むと
の事ありて坪内に出でも感謝す 坪内の宗
うる悟りしも又深く感ずる所あり講義の他にも

丸く星猫に重ずる将来光明の保証也
○七月十二日夜の伊藤氏大隈お藤本に寄し後上
り晩食に食店を入く席上演劇の話出づ試みに余は
て演劇を好むや否やを問ふ彼曰く余は演劇を観るも些
も興味を感ぜず初めて見るも其の面白さを知らず一寸くらい
めしも感動せず又其舞踏論するもドドクして来る
ろすることを多く云ふ而其ものとす音楽は能く知る又甲し
く興味を知らざりき
後又曰く人間は利慾の塊なり利慾を離れて人は
生活することを出来ずと全く後を云ふことを否定す
余は類愚なり太く行くものと云ふ余は雑踏
の都の行くと云ふを風流なるもの知らで大にして行く業

と云ふ全く是風潮なるの故に行くと云ふ
結ハ情用ある遁るゝを厭ふに因く森鴎外ハ只の姉妹あり也
一通過の外思ふ无色に目付すらしめ一寸余習
しかも從れハ其のしぬる事を云ふ奴
○田中智学と云ふ奇妙しき宗教家あると思ひたりしの
其ハ宜しく田鞆之助なることを以て云ふおなきせ
○犬養木堂ハ近頃奇妙しきのいつて暁其ることの小
同く島田三郎同く大東義徹也大東大臣すら余而る
此徒沈黙すれど私徒ハ宜しくうらしく党人を殺為
そして悲くなりし也
○東洋学会ハ今井井上二博士を派遣するとの大隈
伯ハ友人を私き互に通して井上と語りて同く名人ハ学者を

たゞ己活学と云ふハ学ぶ所に隨し君の論し事ある語ら
ん君ハ自ら東洋法国を接続しそれども東洋法国学の
接続すれども文明の談を十分開ける国ハ世界各国ありて
何れの国たるを第一と推さんとする事彼の儒仏学者のぬき
故学者一方に以前ハ彼れらぬる儒学も進歩しハ世界何れの国
なりとするも東洋法国ハ今ここそ正に沈滞し
それども其の所謂る文明国の先覚者なる物も後れの物よ
此のが輸中日本ハ彼の儒学を入れ彼の釈教をも改し
りと雖も巧みに之れを咀嚼し之れを鎔化して之れを日本の
ものとなしたり日本ハ之れ等の為めに其事も忌むべき悪弊
を受けずして美のみ收め之れを開化の素となして捨て
るき道あをつゞけなり是れ豈世界に誇る一つのことなるんや

特に東洋諸国を守護し幾人と日本の文明を進すと云わざる
殊色に古来あるの自国を無視するの事や見るに耐へ
国を治むるを以て惟つるの如きの自国を世界の国の栄
へんをを奴隷のごとくの国のことを支那の歴史に
徴するに著るし然るに今日の如く創見
なるべき国を亡すに女子の自国を被奪すに天罰と云わざる
差支なるべき人数是迄の此の紙幣を以て支那の学問
の悪み人の学識をんを之んを数術大気節を揚げ
よと井上哲次郎氏に問ふ答て曰く諸氏の余を支那と云
ハ伍の得意先を見る余の不学者なるを以て得と
語れり

○危険行旅の移動位考えるべきと既す義

第十二海外に自国を比べ今日を度はも如何の改革をなす
人を尾張の如き全国の移を取扱を為して自国を
と為す様と云へ花り而して自国を尾張
を為すとして他義を以て解する者は
すと七月十日横浜の義一言を述の所と話す

○大隈伯来の事全体が外交問題に就て
日本政府は清国の日本を冒頭も可し所
日本人の上陸を拒むの日本の内人の上陸を
も拒ぐ大隈を云義也の一と世人と伴すんとも云ハ
日本ハ刻々工夫り思へんて拒まるおるべし列
鹿日本ハ和主の位置を云ハ福厚のあるん
人行旅婦海を為す

耶蘇教国と直えるあり

すんだ日本の例を保存するに足るまと年来況けども
金の事と及ぶも聯合こう或る利益のみの為に十数
年を保つるあるべきまで又女学校人種の事開発海し
きまるべきあるべきあるものや気しき美人の美を
改海の巡回の一事あり世界を通じて美人と呼ばるべき
物数あるべき様しるもあるべく、そい強て及ぶすべきる
あるべきこん況況の意味をあるもさのあるべきと唱ひ
○奥田義人氏東京教授書記官長の拡張論
まるべき飲食会は富豪と地
方守中大隈伯の例に面て
言ひ出すべきまで伯風向
中紀行を叩けば於ての拡張
は拡張の様なるべきはて
は拡張の寄るべき所と云
ふ又本内閣中は山縣と桂と
云つて代くんとつとあつてあるとも（七月九日）
○七月廿日例年のごく得業式を学校で行ふ本年
又開校十周年まあるを以て之れをも兼ねるが
学校限伯の為に七月廿日学校を開校の初年度と
伯は開校の初年度と七月廿日と
こ於て日を開くは言まるこのまひ
田と七月廿日とあるは折もあるが
の如く為に新しく学校を
と決しとる後決定をあすべき
日のごとくしとる事柄考まるまる
日のごとくしとる学校の例を

二印堂風の関係ありと誤解されたること大阪学校と
目せられ世人うたがひ深く学校のもの
誤解されたることなどを書きつらねて
ありたし百きたりたる後へ之を論ずれば
いかく高明なる論説に接するを上来まうせしかりし文出
大学論説大学教授なんどを解説せるを有用学
校の明らかなる所を忘れまじきことあるを聞きうも
去年なりし如きなんとなく学校の困難を感じ
しことなどを家富を論説し学校のため大義絶
を仕うるなり生徒諸生の指教する
ヨ見えべこれを聞し論説の如き論説なる於若し誠
情を悉きれもし御之以来家富之幸を
ちもし我々ならば弱々を言ふ誠に恥を忘き紀さるため
金のぬきに成人と手のもひ之の踏む所をひらく紀
情使の情を異くなり

○七月会宮山田氏と四を内寺所の行を除て種と相
談をなす山表に宮於農多の女を要り岡松家と記録
をなす山表に流次井上義と及ぶ山表同く宮松老
方ヶ之介と井上に義多と歩すと行を八農多し金し始
めより同じ高之し紀之井上に向うまりて金を論
まる新相面会うしあるを宮松氏を新めること
とをなす井上に死如しを新めること
運動して百金のなるを論あり同く金に能を行し紀
宮松(変文)木下(日本木下房次郎文)の為先生と論ず

―て竹澤井々さと細まの手の寸と呼のみし一人高時金い
生の跡を慕ふ哀れ深く（しかるに志を抱きしの地志い為）
こ者し得ず（即ち徒に）ん高い未下廣次の好ンとこれ
八々や金ゝ者もて思ふ（彩くく斯る困みとれて体の
一生のみを養ひて副とちさん）と山素心大き盛する
所あり初め我を折りたりと云ふ
○金ゝ大ゝ者ゝ此の内雄この者を抱腹と云ひし
金生雅ゝを長い金ゝ無くんことを未だ内聴の
す者は多人交と此の者を用ひ金の用ゝを
無ゝ者ゝしめ通ふ金の者ゝとする後山の黄金金
の為めに弾を送いす長と内と殺ゝ所と云ふ
さゝと云ふ日本人金ゝ者ゝを云ふし所金ゝ仍る

年の手内を紀すことを此
○自由堂の武（ヒ）武道和の流行歌を作り
て現内閣を誹謗す此歌を特殊なる法律を以
刑律を問ふる弁護士山田美妙氏（国と直ふの意
興味の人然ゝる保ゝ此の弁護を起さる作れの法
庭の於て此の弁護士やは衆人の凝視する所
ゝる長い山素金ゝ者ゝて思ふく金ゝ道行歌の極めて拙
ゝる個所多を立ゝを指摘し此の拙作の人心
人心を動ゝのゝゝゝん若者の雷天動地ちんと自
然しゝんも動ゝ天動地こゝ人間無ゝゝゝ
之れを以て弁護の辞と云ふと一笑す（七月廿四日）
○和三の立法続学校を新しく一国とちさんとの論の手初

久しき間斯くの如き故に宮山黌に於ても一たび之れを合せしこと
ありしが明治廿九年に至りて又之れを分離せしむることゝなりし
然るに此頃此間は又絶へてありき学校とも交渉は未
なり然るに宮は清国法あるも是れは一人の西洋法
学院を以て同じからざるにや法系の表面理由とする
所の大学也ともに新たに設するや大方に別に庭を設けた来
未だ法典の大法を完備するに至らず故に其法律学
校を作らん一の大法律学校とあらざるべき統一の学
典を編して一種あるに属するの体なると認めんと欲する
法系とは是其法律学校今作との和合を獲んと
欲するなりおもふに他の法学校の之に同じ之れにあらず
也此法学校ならは古今の由の所謂うたきるの由なと

仕済も能く保存せられ學園すら学術の光を放つ
に法学者の改善を図りて漸次として此間隆く隆
盛に進て帝国となるを計畫の一方に従ひとなれん
進むる迷惑にこすれどもせ梅山の意見を聞くしえん史
書の指定を得んとすべく主旨を記に於しドウあつて
なれ学術は独立して将来を全ふせざるべからずと學問
学術の未来をもつて我が國に適する法律を定めんとは実
に審思熟考を要するなりや（七月廿書）
○山一つ余て就職を求むるに努むべし
友人等と共に
羽織袴と

あり彦さしもの思ひ彩る徴かなる處の人も之を求るる所也
喩へば一銭に不時なる事をも何故と疑ひて暇に隨ひ静か
小喩之帯の調意を以て山一の門に生勝手として之を擬
し獻せんとする所以にて亦之を務る者長ずる為に荒
干山一回く帯は調意に及ばず之を以て帯を代へて山一
又古の能書筆者の詩歌を書を並べて思ひ傑作を胸
巻紙の人の角おもしろきを愛する所にて詩人喜び隔し
地る花にその窓に之をも見る陳する所にても詩に毎月一回を
詩稿して會の不期し圓を待つて山一も又お面白き也
○山田市伴内なる過の者を傳ふる遙國にアヅマやあり命
して抱月亭とさ云ふ面白き處の山一つ向ひて思ひ又大地の秋
を讃へ得るや大きに山一生の善美の詩才なるを

ことを思ひたる方共にする者も佳句を讃する所を求め思ひし
ころへグタキウキニテイと讃ずるものにと云ふ嘉唱所為
○露國ハ日清戦争後日本の隆盛なるを紀し武備の
擴張を畫して内々勢を折らんと欲するものならし那
に露國探偵の内地に多く潜伏しをることとハ必務の前
為の多く論ずる所なりしを露國が我國情に通ずる
や尋常ならず而して事情を深く知るの能力ハ甚だ朝鮮
なれバ何んとなれバ日本國人ハ其山形を熟知し地を見るも
其に深く思ハざる者ありとも併せて我邦人の注意すべき
ハ猜忌に深く甚ならざる歟
○山県に書記官其他の様に深く其性を矣あしくゆくく山
県自身と椿山に在ま其の國をさやるる何人か山県に

奥田と記するは新しき関係ある田中法三に向て法師
顧る「大隈侯は曰く奥田氏は[illegible]
[illegible]と言ふ彼れ[illegible]行くへ不明[illegible]」
と云へるとて侯へ修山の奥田に向て「進歩者を[illegible]
めて山先と書[illegible]」と俗のめく法法とは
あんと言ふべき[illegible]
[illegible]あいて奥田一郎を[illegible]奥田は主に[illegible]
[illegible]法の[illegible]池[illegible]
[illegible]

十五の庫

を待ち或は山先と呼すべし」とのよしにて進歩者に[illegible]
[illegible]

○(七月三十日)周四郎の[illegible]の illustrated
[illegible]
我国の人[illegible]
[illegible]
[illegible]

○陸奥伯爵[illegible]而て大隈の別墅を去りて本
[illegible]
[illegible]
伯也と言し陸奥の大隈のお屋敷と近接す
陸奥大隈曰うはこは近来[illegible]
[illegible]
○大隈伯爵[illegible]府開発の細部の事業を
[illegible]
一番を喫す次高山一二三[illegible]
[illegible]
[illegible]

又世ゝ後の書狀數通あり菊池七郎三郎と見えたれとも文ハ石川義氏の家にあるのつゝあるべし又文章にも拙なきあるべしとて世人決して自ら指置とん思ひ難し

○吉廣新史文を見人の奇異に伝へ得ること所ん地に文流刑に處せらるゝの後ち文の後人なん国と文郷に流の文流せ所しん世人の四分書屋の收や牧書（三ヶ所）遠ちきし前に著やと

○流罪に之所ハ世ゝ高義親の先祖まうん今ハ事実に校長やその矢崎文雄に所ん先祖家

をいても生の古き淳の高ゝ所ん高ゝ所ん彼ん高ゝ

的に三ヶ福岡に之をうけとり菊池の流ん

彼ん人ハ今ゝ高福岡にあり義家文の子の伴稿

を著述せし稿を高ゝすと云ふ今ゝ福岡高し力高

的義氏の所史を流文得し世を殺ひ試みゝ之を

向ハ菊池四ゝ家と誤譯ゝすと表の伝の高

殺ゝ後に家頁を公刊ゝ江湖に供笑と侍ち

歟

○廣新流家の門ゝ高ゝ考ゝ立ゝ高の出ゝ後ゝ

彼ん人家ゝ上手ゝ高ゝし事歟の高ゝ歟ん

彼ん高ゝ氏昌ゝ高ゝし人ハ学の高ゝ高と云ハ高世

の高ゝの二松義氏ゝ高ゝ高ゝ高ゝ高ゝ高

[illegible]

世渡り上手なる人を諸人のめでうらやんだ所の[illegible]
五月の田植を[illegible]とて又人の詩文なども評す
[illegible]も決して[illegible]を汚さず[illegible]
し人の歌へを聞きまるハ[illegible]
人[illegible]上手なるもしも聞く[illegible]
○菊池武吉[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

晩年[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○田中不二麿[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四尺三寸程なる無銘の一腰あり古雅なる拵を付する家あり
しと解し難き一腰あり石帽を付する家あり
拵うるはしく鞘黒ずみて淡色の〆キとなる
と矢張〆キとなるあり中の口は略〆キ淡色
なる上を掛しを入れたるもの中の柏子をあ掛し
置けるもの一腰もあり一腰何の刃と少けい
印しぬ人を肌を見られる見る此一家に
一の埋金を地蔵と称すると称して此笑資
を信ず（以上六項八月十日録す）

○八月八日手紙乙鞘のお無き家数を人を訪ねし
序を以て ある上陽を清し 金作文庫の豊書
を見る 其の四紙の存する称名寺を訪ひ偶ま

近衛の兵士多く来浴し有りて寺僧の不案内なるを出すを見て見ずに曝書せしめ
る本書く徒に豆きなるものいえを見たるに宋本大
版元注六巻大花注金印一巻も缺くなく見事
保存しあるは珍らし先年伊藤侯に二部因位な
ることもあるとう又富本巻抜の文選こんの国と四
る廿五巻ありし内四巻巻い幕府の聖堂に納め寺
に現在存するは廿五巻なるとの見しは廿九十
七史論一とあるなるを主流なる指摘するを見めるに寺
僧の語る家に伝ふは石川四郎いこれを見て驚る
毛延しえる伝ふも文選を抜ひんに大なる益あり

べしなどと云ハんなどと紛れ古文書新発見の八仏
寺の世話するものゆゑ多く黒き堆をうて書の一隅を
ぬり先年平田篤胤翁ハ古文書を拾ひ中に古国
一枚を出し「これ一枚うるまを買ふ」と言ひあるとて平
や牛国に買もとめ紛失したりと伝聞の伝説を注記
べきすませや又主君と今あ主君へ為あり
その新田侯も什物を修理すること数年現在
田藩主の文書ハ伝聞あると紛失数年
毒を惜住しことあるしも使者伊勢も路路を吹
ハさんて使命を果さずとう寺にも数度と賞
を書内番へ御家上を新あるこ一旦決せし向もあり
一説なんど文庫を再建するに四五日止まりなりと云
ふ新田文庫之遺跡ハ寺内の左に方山のまゝ隆起
を分ちて示すとして接け山の向ふ国と名山寺の
御所あるし由なる御所に沿ふる接もあり文庫
もあるし跡なる再建を示すと寺つを又もなし方
小さき宗なる接ぬて紛擬のみなるこのせ高子
方敵山麓なり北の耳寺の伊藤侯手紙を新
を勧めを作らしめしなるとて内の寺に新帰
とる国なるとゆけば紛擬のみ
○八月十日新聞を読みしに「屋敷」二三をゆるなる
書を示す

徳川の史論
武者の計死

面を思ふ形ち杖を曳きて金の名木

三杯目つゝ三日つと七し
五人力そうんと酒し

走大黒走ゝて手ぶる
投銭四投けて頭を垂く

深めし海の月うう海月う
隠ゝ村の面よ村面よ

投ゝ三つてい投米芝文
舟ゝ三つてい舟米芝文

雪を国めて雪寺了解
血を深めて血一一

今朝の雪雪行雪
昨夜の火沈丸竹

霞七ゝ八月御
月七ゝ八梅香

夢う現う幻う
神の袂う懐う

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

疏す

○八月十三日雨雲時々降し俳諧の用意を第ひて俳諧
連句をする俳諧の拍子を[illegible]
俳諧をする[illegible]
[illegible]
[illegible]

てう云婆婆の文をせくカンパンは兎角に詩を
又路おを浮しと思へ彼の人物あて猛猛し人物と見る
淡泊まこと敬倫を閑もし物金の詩ひし時に彼の妙を
思ふあるこんの妙絶うつもしきそのこと高山林竹う彼
人を浮しと思ふこと武道と云へることを憶ほして西方を
絶ちて又思へ彼の心思路のこうこう藏名お石を
ちちと思へ物質をるど熱心こうつすもの実
利益
中庸人間の行設の極て一人あるべきこと
まもも変化へ孔子人思へ彼の天才ちうもの
飯ちと浮名の彼のを持上ちあるる彼の人格と氣
ちりうまきと文章のめきもの巧を衒ひ好ちいやちし
彼のちちの浮云ます
彼の人江戸光の樣まも彼のくてこと呼んちちしポープ
の左も似ちう彼の人人の皮肉とその才をあちんもも
嘲ちんの又其の風刺も時して涙うめちもちあ
ら彼の人共の霊句を思ひ出す部屋手帳書
きは立ち社制 暫ひちう拙初めて市をもり行て
一十流二十ちて成ちと諸物ちる人陋や彼の表面
イうおる方(とも使や彼のある言を浮めて彼も平五
も彼しうある……僕えんとう十日も一通ちも人で
書あまのあるが書ちる彼ちきん彼ちる物質
写ちうちきん彼ちる二十頁(印刷して)もまる
生的いい氣の彼ちる変候を急へ彼をもめても
のえんまひん病癖対記きて自ら快陽つて

金箔を敷き彩色画書くく海棠……就巧の文考
ひ文章の紙の皆もて写しかめて考ふ……總
庭をんどん動きも文章も弱めるうい紙の作
もぞい性うも学ぶをなすの止まると云ふ……總
庭も方精(注)この作を作るとうとも彩の作ものしる
田舎の面……何人ひも書うまる……学れるえ成
文書いて黄いたくるる……地のるのう後のを
墜落をもる所次ひ彼の多を性に酒の文歌
の文章をんと作る新拙すい……彼の作性に
考しの要注(一旦書きしいの)を繰返すさきす
……ジラルジエリオットは女性文人のたんを許する
を一切渡ますさし断る弱きことをえ困る人まく

渡の詳ひも渡ひ作し年賀することは已めるう
○法眼文人むの人をあるまま進行の法文を記を
渡りをめるるのを待つの参宴を求し 落合ありり
と雑も紅葉を抜ひて多くの子弟を集めて
已の武術を演ひしめたるこのあの法を吹する
文を作るのを書りて色情をう牧を色情をする盗
おをり法眼のの法百巻仏あるを
有るを来山をの新作作をを
を見ることを性をもわひ去田移陰
琴山方半一集のの集のめるを法指くしを作る……法
山号の詳を法の山号山号半法ちを庵を寄りおの
新号を書くをい」をを法りとをの半二集の上本

の頃、山場とて都へとゝのうて蒲池えゝの伝也
口碑に寛平七年丸屋館の城主蒲池治部少輔
又十郎国を失ひ筑前の国印ヶ瀬に移る
此時名を改め車と称す
道を大いに変ひけり筑前の
きうとうも蒲池の落也

閲覧室

明治三十年三月